

二松学舎大学人文学会 第一二〇回大会 要旨集

第一会場

【研究発表題目】

澁澤龍彦「うつろ舟」におけるミソジニー

——一九八〇年前後の女性をめぐる社会状況と比較して——

【発表要旨】

澁澤龍彦「うつろ舟」は「海燕」一九八四年九月号に掲載された短編小説である。「うつろ舟」は、三つの掌編を結ぶことで、一つの短編として成立している幻想譚である。各掌編は主人公が不思議な法文(ほうもん)を聞く点で共通しているが、直接的な関連は薄い。大きく紙幅が割かれている掌編は女性が男性を翻弄するものである。「うつろ舟」に澁澤の遺作『高丘親王航海記』に通じる「消滅」のモチーフがあることを指摘する評論は少なくないが、短編としての「うつろ舟」を中心に論じた学術的な文献は管見の限り二篇のみである。

「うつろ舟」が発表される約三年前の一九八一年には女子差別撤廃条約が発効され、日本は八五年に同条約を批准した。その一方で、「うつろ舟」からは男性中心主義的なイデオロギーを読み取ることができ、従来、澁澤の持つミソジニーには批判がなされてきたが、小説作品を個別具体的に論じるまでには至っていない。

本発表では「うつろ舟」におけるミソジニーを抽出すると同時に、一九八〇年前後の女性をめぐる社会的な背景の中で、「うつろ舟」がどのような位置づけにあるかを考察する。

【研究発表題目】

明治時代後期の「断り」表現―金色夜叉を中心に―

【発表要旨】

本稿では日本語における対人配慮表現を歴史的に明らかにするきっかけとして、明治時代後期の小説における「断り表現」に着目し、現代語における「断り表現」と対比をしながら、当時の「断り表現」を調査し、分析することを目的とする。具体的には『金色夜叉』の中にあつた断りの場面の調査を中心とし、明治三十年代からの「断り表現」を考察したい。

『金色夜叉』は尾崎紅葉の代表作であり、明治の小説で尤も大衆に愛読されたものとも言われている。読売新聞には明治三十年から三十六年まで断続的に連載された。単行本は春陽堂から続々編（三十八年）には新続編が含まれて刊行された。そのため、明治三十年始めからの凡そ8年間の雅俗折衷文における「断り表現」を明らかにすることができると考えられる。今まで、対人配慮表現の一環として「断り」に注目したものに、森山卓朗の「断り」の方策が類型化を行っている。また尾崎喜光は「断り」の場面で期待される典型例…詫び、理由説明、断りの述部という3要素を基準し、類型化している。森山と尾崎の類型化を参考にしながら、本稿でも明治時代後期に「断り」表現がどのように構成されていたのかを考察したい。

【研究発表題目】

「名付け」の考察から見える表現規制

——『常陸国風土記』を中心として

【発表要旨】

行政文書「解」である風土記には、数多くの地名起源譚が記載されている。和銅六年下命の「好字をつけよ」という要求を容れたからか、改名記事が見られ、また、実際に使用されている地名とは異なる地名の記載もある。「風土記」と一括りにされるが、現存する五風土記は、成立事情、編述者、表現の特徴などが一様ではない。地名起源には、神、天皇、人を起源とするものがあり、その割合も各風土記で異なる。また、『常陸国風土記』には、恭順しない異族起源の地名もあり、同一の地名に複数の起源譚を記載している記事もある。『常陸国風土記』には、編述者が、中央政府側の役人であるゆえに表現に規制をかけたつても、一方では、その枠から逸脱し、在地のものへの心寄せを、無意識的に漏らしたのではと思われる部分もある。「名付け」という行為は、創造そのものであり、古代人にとっては重要であった。名をつけ変えることや名付けのプロセスを改竄することなどは、権力が人々を支配するためのツールである。『常陸国風土記』の名付けにおける見えざる規制や逸脱を、『古事記』『日本書紀』他風土記との異同も視野に入れつつ考察する。

第二会場

【研究発表題目】

清末中国対日教育視察と日本側の対応

— 吳汝綸と伊澤修二の資料を中心に —

【発表要旨】

清末中国における国文教育制度の構築が日本をモデルとして構想されたことはその歴史的経緯に明らかである。制度構築初期の重要人物である京師大学堂総教習吳汝綸に着目し、彼の日本視察、特にこの視察に対する伊澤修二をはじめとする日本側の働きかけと、それを受け入れた中国側の動きを丹念に分析はこれまであまり行われていない、新しい観点である。

吳の日本視察を契機として、日本側の動きとしては日本の教育界が中国の教育普及に関心を持つようになり、中国の教育普及事業を啓発できる態勢を整えようとした。伊澤は泰東同文局や漢字統一会を設立し、書籍出版や漢字の音韻研究等を行った。一方、吳は日本の教育情報を収集・検討し、中国の言語統一による「愛国心の育成」を目的とし、これに加えて読経教育を強化し、後の学制制定に反映していった。中国の国文教育の成立過程が中日双方の相互関係によって生み出された歴史的成果であることを解明したことは、日中教育交流史研究及び中国教育史研究における新たな知見として価値がある。

【研究発表題目】

林鶴梁の文章観

【発表要旨】

林鶴梁（一八〇六―一八七八）は江戸時代の儒学者である。名は懃、通称は伊太郎、字は長孺、鶴梁と号す。文化三年に上州高崎で生まれ、文化十四年頃江戸に出て佐藤一斎・松崎慊堂らに学んだ。著作としては『鶴梁文鈔』『同続編』などがあり、また日記も残されている。

鶴梁は幕臣として勤めた一方で、『鶴梁文鈔続編』の序文で森田節齋に「君文、譬如長江大河波瀾洶湧、可驚可喜、非学有淵源、安能至此乎」と評価されるなど、幕末明治期には文章家としても名を馳せていた。

鶴梁に関する研究としては、坂口筑母氏『小伝林鶴梁』などいくつかの研究があるものの、管見の及ぶ限りでは彼の文章観を深く考察したものは見当たらない。しかし、『鶴梁文鈔』及び『乙巳稿』などの資料からは彼の文章観や当時の文章界に対する批判を読み取ることができ、これによって鶴梁の文章が幕末明治期に好まれた理由を伺うことができる。

よって本発表ではまず、鶴梁の生きた幕末明治期の文章界の思潮を確認し、その中で形成されていた彼の学問、特に文章観の形成過程について明らかにする。次に鶴梁の文章観について、『鶴梁文鈔』など彼の著作から読み取ることでも明らかにし、彼の文章観が同時代の文章界の思潮の中でどの立場より発せられたものであったのかを考察していく。

【研究発表題目】

「天命図説」を巡る諸問題―四端七情論弁をめぐる

【発表要旨】

朝鮮朝時代の李滉（号は退溪、一五〇一―一五七〇年）は、中国から移入された朱子学を、朝鮮独自に深化させた人である。特に、奇大升（号は高峯、一五二七―一五七二）との間で交わされた四端七情論弁は、朝鮮儒学史上において最大とされる論争となった。

そのやりとりの始まりとなる材料となった「天命図」・「図説」は、もと鄭之雲（字は静而、号は秋巒、一五〇九―一五六一）によって作成され、鄭之雲の依頼により李滉が図に修正を加えたものである。この図は、朱子学の理気論に基づきつつ、「天命」と「人（ひと）物（もの）性（せい）」の関係を図式化し、論理の展開を図っている。

これ以前の中国元明時代および朝鮮朝時代には、図説による朱子学解説が多く作成された。李滉には他にも、「聖学十図（大学図、西銘図、小学図、白鹿洞規図等）」など、学びや心の在り方などを図式化し表現することを多く行っている。

本発表では、主として「天命図説」四端七情論弁に焦点を当てて、こうした、「思考を図式化し表現する」との意義について、検討していきたい。

【研究発表題目】

『管子』註釈類小考 ― 『管子集校』採録註釈を中心に―

【発表要旨】

『管子』は、全八十六篇から成る先秦諸子の思想書である。その内容は管仲の自著とはみられず、版本の状態や成立年代が不明瞭で、文字の混乱が多いことから、『管子』は特に難読の書として扱われた。

その中で、一九五六年に郭沫若らによって刊行された『管子集校』は、刊行当時までの関連註釈を選び取り、通読に益する校勘を施したものである。この書の刊行によって、『管子』が有する、「文字の誤りや混乱が多いこと」による問題は飛躍的に改善された。

しかし、『集校』は通読に簡便である反面、本文の語句を抜粋し、編者が必要だと判断した註釈のみを掲載するという特徴を有するため、その註釈が原著ではどのような文脈でなされ、『管子』の主題を如何に考えて示されたものであるかが不明瞭である例が頗る多い。

それにも拘わらず、現代の『管子』研究においては、『集校』に多く採用された註釈のみが注視され、かつ『集校』の校勘のままに使用される傾向が顕著である。そこで、本発表では『管子集校』が採録した四十二種の註釈類を中心に、それらの流传過程と版本の伝世状態を整理し、各種註釈類が『管子』及び『集校』にどのように帰結したのかを検討してみたい。